日　新　聞　第3種郵便物認可

福岡市博多区の国指定史・板付遺跡の「復元水」で30日、子どもたちや護者計約60人が田植えをた＝写真。「弥生時代の活を知り、文化財への理を深めてもらいたい」と教委が主催した。

78年に発見された弥生時前期の水田跡を復元した

「弥生の田」で子供ら田植え

博多・板付遺跡

田(約300平方㍍)に、赤米、もち米の苗を植えた。護者は弥生時代の貫頭衣まとった。

同市東区の小学6年生、知ゆきのさん(11)は「田ぼに入ったのは初めて。初は泥の感触が気持ち悪ったけれど、慣れて気持よくなった。お米ができ仕組みがわかりました」楽しそうだった。

無料。拉致被害者の横田めぐみさんや増元るみ子さん、松木薫さんらの家族や友人との写真や家族のメッセージ、国内外での救出運動の経緯などを、写真や文章など約100枚のパネルで紹介。講演会は松木さんの姉、斉藤文代さんと、増元さんの姉、平野フミ子さんが参加を予定している。

郷土史研究家取り組み紹介

取り組んだ「高取焼400年祭」を説明。「一過

いま ひと ふくおか

田んぼ幅広く再評価を

歴史や文化、検定で共有

九大大学院農学研究院助教　佐藤（さとう）剛史（ごうし）さん（33）

「福岡県内にため池はいくつ？」「刈り取った後の稲から生えてくる稲を何という？」「アメンボの名前の由来は何？」

コメ作りから農業の歴史まで、田んぼに関する幅広い知識を試す「田んぼ力検定」を企画した。

試験は8月、福岡市東区の九州大である。合否も出ない。高得点を取っても何の資格にもならない。試験が終わったら、みんなで一緒に答え合わせをする。「現役の農家から農業の技術者、子どもまで、田んぼでどれだけコメが取れるかだけではなく、歴史や文化など色んな見方を語れる場にしたい」と話す。

大分市の出身。福岡教育大で農業地理を学んだが、「決してまじめな学生ではなかった」。教員採用試験に落ち、博士課程で移ってきた九大で転機が待っていた。

農業のことを知らない研究者が労働時間などの数値で農業をとらえ、農業についての学術論文を書いている。疑問を抱きながらも、自分はこれから何をするべきなのかー。迷いを持ちながら、県内の農家に頼んで田植えや稲刈りなど農作業を手伝った。そんななか、会話にのぼった何げないひと言が心に響いた。

「今年は、山のあの木の花が咲くのが遅い」

自分の田畑だけでなく、周りの自然環境に向けるまなざしの広さや優しさを感じた。平日は大学にいても、金曜日の夕方から農作業の手伝いに出かけ、月曜日の朝に大学に帰ってくる生活を続けた。みかねた大学の指導教官は「外出禁止令」を出した。

「毎日をどう豊かに暮らすか。農業体験ではなく、人生勉強をさせてもらった」と振り返る。

農業や自然環境をめぐって、さまざまな企画を考えてきた。

九大の新しい伊都キャンパスが造られつつある福岡市西区元岡で生き物の調査などをしてきた環境NPO「環境創造舎」の代表理事として、福岡市内の蔵元と手を組み、売り上げの一部を新キャンパス周辺の里山保全にあてる大学ブランドの日本酒「九州大吟醸」の生産・販売も進めている。

「農家が田んぼにどんな生きものがいるのかを調べれば、お金が支払われる制度」が研究テーマの一つ。田んぼの価値をコメの収穫量などだけではなく、トンボやカエルなど生き物を育む場所と位置づけ、それを守る対価として税金を使うという仕組みだ。県が「農の恵み事業」としてモデル事業を進行中で、政策立案にかかわった。

「田んぼで生き物を作っているという価値を評価する風潮が生まれてきている」と、これからの広がりに期待を寄せる。

より多くの若者が農業に触れるきっかけづくりも今後の目標だ。「後継者づくりということではなく、農作業に親しんだことを覚えていてくれれば、将来、農業の応援団になってくれる」

九大農学部の建物の屋上で、3㍍四方ほどの小さな田んぼを作り、稲を育てている。農家が毎日田畑を見回ることは労働なのか、楽しみなのか、感じたかったからだ。

水の張られた小さな田んぼでは、野外ではなかなかみることができなくなったデンジソウが4枚の葉っぱを「田」の字の形に広げ、その下では指の先より小さなカブトエビの子どもが泳いでいる。思わず、顔がほころぶ。

「ヤゴが育てば、トンボのお父さんという気持ちになる。むちゃくちゃ楽しいですよ」

（福島慎吾）

農学部の建物屋上の「ミニ田んぼ」と佐藤さん＝福岡市東区の九大で

古道具品を買い受けます